

## 問題 1

受注生産経営を行う株式会社HU工業では、実際個別原価計算を行っているが、製造間接費については、機械作業時間を配賦基準として予定配賦している。製造間接費の変動予算は、月額固定費16,000,000円、変動費率750円/時間である。当月の製造間接費実際発生額は30,300,000円であり、製造指図書#805、#806、および#807には、各々5,500時間、8,000時間、4,500時間の実際機械作業時間を要している。次の①～⑤の金額を計算しなさい。ただし、差異の計算については、解答欄のカッコ内に、有利差異の場合には「有利」と記入し、不利差異の場合には「不利」と記入すること。

- ① 月間实际的生産能力（20,000時間）を基準操業度に採用した場合の予定配賦率
- ② 月間予算操業度（16,000時間）を基準操業度に採用した場合の予定配賦率
- ③ 月間实际的生産能力を基準操業度に採用した場合の製造指図書#806への製造間接費配賦額
- ④ 月間予算操業度を基準操業度に採用した場合の予算差異
- ⑤ 月間予算操業度を基準操業度に採用した場合の操業度差異

## 問題2

株式会社YK工業では、製品Wを、二つの連続した工程作業を経て製造している。次の<生産データ>および<原価データ>に基づき累加法による工程別総合原価計算を行い、①第1工程完了品原価、②第1工程月末仕掛品原価、③第2工程完了品原価、および④第2工程月末仕掛品原価を計算しなさい。計算途中で小数点以下の端数が生じる場合には、最終計算結果においてのみ四捨五入すること。

ただし、仕掛品の評価方法（原価配分）は先入先出法による。なお、原料はすべて第1工程の始点で投入される。また、カッコ内の数値は加工費進捗度を示している。

### <生産データ>

	第1工程		第2工程	
月初仕掛品量	2,400 個 (0.5)		1,600 個 (0.5)	
当月仕込量	6,300 個		6,200 個	
計	8,700 個		7,800 個	
月末仕掛品量	2,500 個 (0.4)		1,400 個 (0.75)	
完成品量	6,200 個		6,400 個	

### <原価データ>

	第1工程		第2工程	
	原料費	加工費	前工程費	加工費
月初仕掛品	264,940円	173,860円	360,050円	224,750円
当月製造費用	598,500円	818,400円	各自計算	1,862,000円

### 問題 3

X社は半製品Aとそれに加工を加えた製品Bを生産し、半製品Aを1個5,500円で、製品Bを1個9,000円で販売している。現在、同社の販売責任者は半製品Aの月間販売量を現在よりも900個減らして、その代わりに需要が増えている製品Bの販売量を増やすべきか検討している。半製品Aを1個使って製品Bが1個生産されている。また、半製品Aの販売量を減らして製品Bの販売量を増やしても、追加の販売費・一般管理費は発生しない。製品Bを生産するに当たり、半製品A以外の直接材料費として製品Bは1個当たり2,100円かかる。さらに、製品Bは1個当たり800円の追加的な直接労務費が必要である。製造間接費の増加は次の変動予算から見積ることが可能である。

月間直接作業時間	6,000 時間	6,500 時間	7,000 時間	7,500 時間
製造間接費予算	4,800,000 円	5,075,000 円	5,350,000 円	5,625,000 円

X社は現在、月間6,500時間の直接作業時間で操業を行っている。そして、900個の半製品Aを加工し、製品Bを900個増産すれば、月間直接作業時間は7,000時間になると予想される。

以上により、①半製品Aのまま販売した方がよいか(第1案)、あるいは追加加工して製品Bとして販売した方がよいか(第2案)、どちらの案がいくら有利になるか計算しなさい。②その根拠となる計算過程を示しなさい。

#### 問題4

以下の問題について解答しなさい。

- ① RI（残余利益）とEVA（経済的付加価値）の意義，特徴，相違点について説明しなさい。
- ② 原価企画と原価改善の相違点について，原価管理機能の観点から説明しなさい。

## 問題 5

次の用語について説明しなさい。

- ① 安全余裕率
- ② 活動基準原価計算の長所と短所
- ③ ローリング予算